

瑞穂町

まち・ひと・しごと創生総合戦略

平成 28 年 3 月

瑞 穂 町

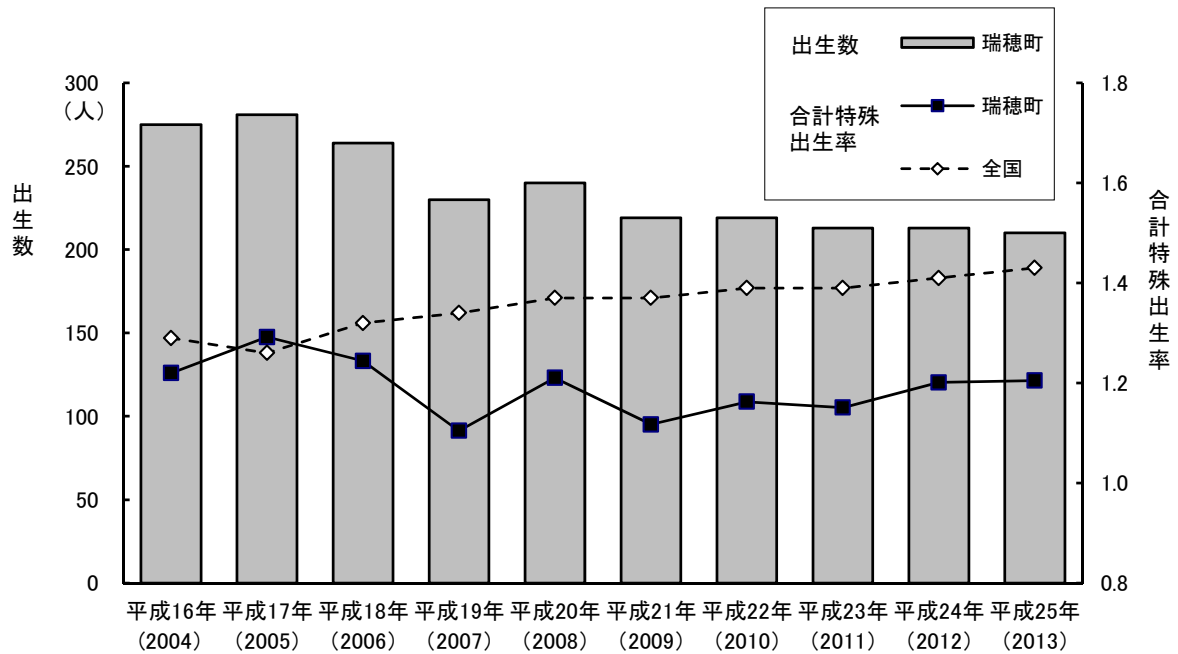
③出生数と合計特殊出生率の推移

瑞穂町の出生数は、減少傾向が見られますが、直近5年では210人台でとどまっている状況です。

1人の女性が一生に産む子どもの平均数である「合計特殊出生率」の推移を見ると、平成17(2005)年には1.29で全国を上回ったものの、その他の年はいずれも全国を下回る傾向が続いています。

瑞穂町の合計特殊出生率は、平成19(2007)年以降1.1台まで落ち込む年も見られましたが、近年では上昇傾向が見られ、平成25(2013)年には1.20となっています。

【合計特殊出生率と出生数の推移】



資料：RESAS

④出生・死亡、転入・転出の近年の推移

出生の平成14(2002)年以降の傾向を見ると、平成19(2007)年から平成21(2009年)にかけて、この期間の中では大きめの減少の傾向が見られ、平成21(2009)年以降は200人前後で推移している状況です。

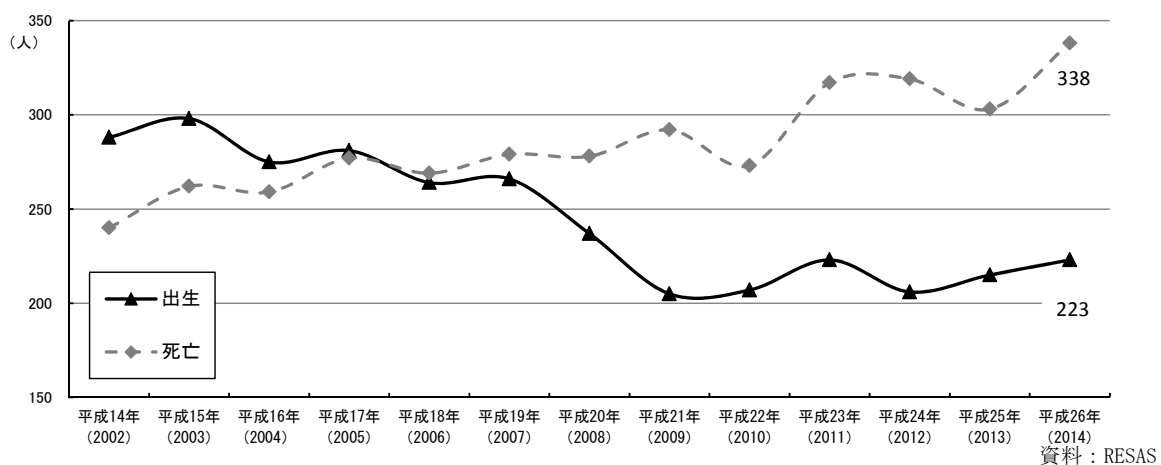
死亡の平成14(2002)年以降の傾向としては、それまで200人台前半だったものがおおむね漸増を続け、ここ数年は300人台となり、平成26(2014)年には338人となっています。

平成18(2006)年に死亡数が出生数を上回って以降は、自然増減(出生数-死亡数)としては自然減の傾向が続いています。

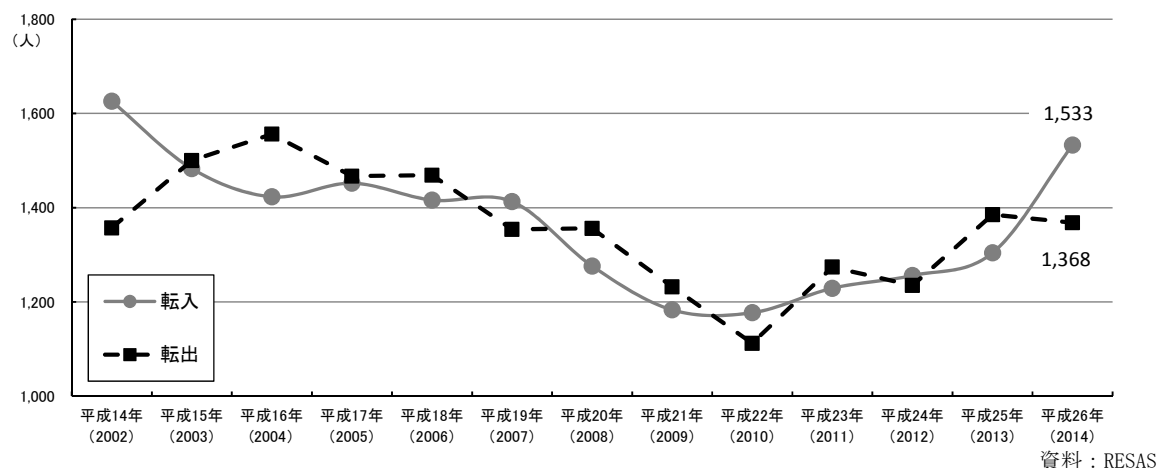
転入の平成14(2002)年以降の傾向としては、転入者数が減少する傾向が続き、平成22(2010)年には1,177人と最も少なくなったものの、その後増加の傾向に転じ、平成26(2014)年には7年ぶりに1,400人を超え、1,533人となっています。

転出の平成14(2002)年以降の傾向としては、平成16(2004)年から平成22(2010)年にかけては減少が続く傾向が見られましたが、その後は転入と同じく増加する傾向がみられ、平成26(2014)年には1,368人となっています。

【出生・死亡の推移】



【転入・転出の推移】

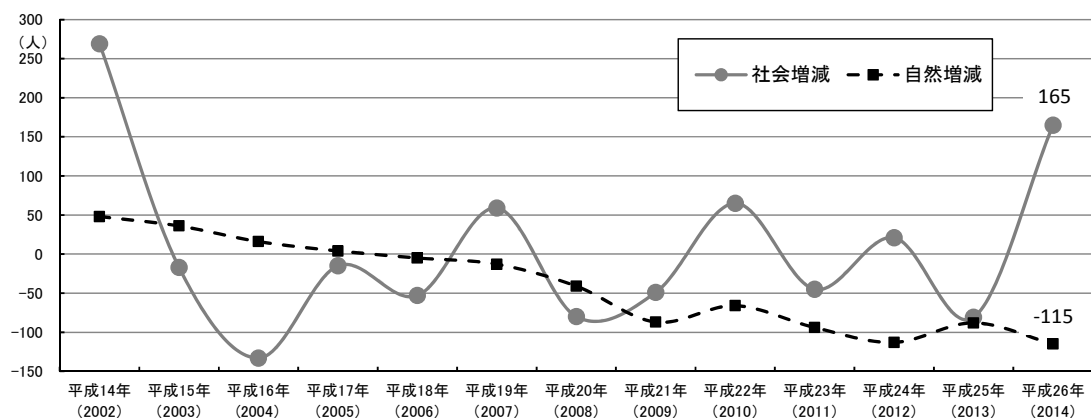


⑤総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響

社会増減（転入数－転出数）について平成14(2002)年以降の傾向を見ると、この表にある13年の間では、前年比が3年連続で減少することはなく、平成14(2002)年や平成26(2014)年では100名を超える社会増となる年があるように、平均してみてもやや社会増の傾向がみられます。

一方、自然増減（出生数－死亡数）については、平成14(2002)年以降ほとんどの年で、前年比でも減少する傾向が見られ、平成18(2006)年に自然減となって以降はいずれの年も自然減が続いています。平成24(2012)年や平成26(2014)年では100人を超える自然減となっています。

【社会増減・自然増減の推移】



資料：RESAS

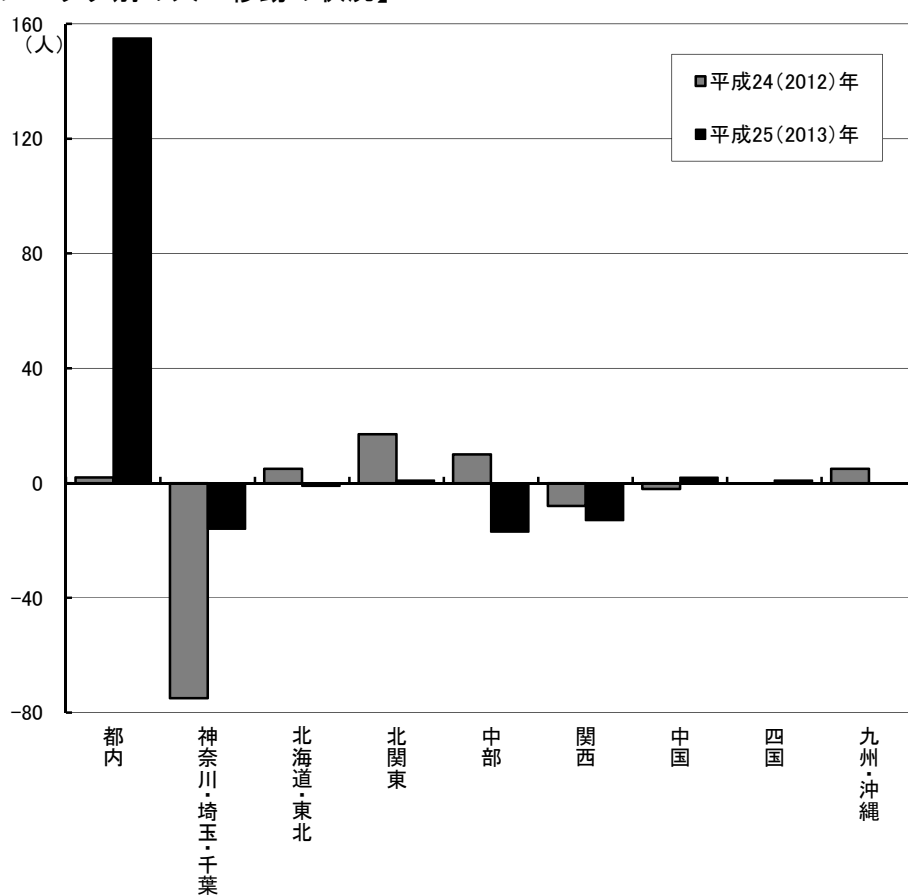
⑥地域ブロック別での人口移動の最近の状況

地域ブロック別の人口移動（転入数－転出数）を見ると、平成 25（2013）年で都内からの転入が多いことがわかります。

神奈川・埼玉・千葉の 3 県へは転出の傾向が強いものの、平成 24（2012）年に比べ平成 25（2013）年では大きく転出が減っています。

その他のブロックについては、いずれの年も 20 人以内の小さな移動状況に収まっています。

【地域ブロック別の人口移動の状況】



※プラスが転入超過、マイナスが転出超過を表している

資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

⑦周辺市との人口移動の最近の状況

周辺市との人口移動を見ると、平成 24（2012）年、平成 25（2013）年ともに転出超過となったのは東大和市と八王子市です。

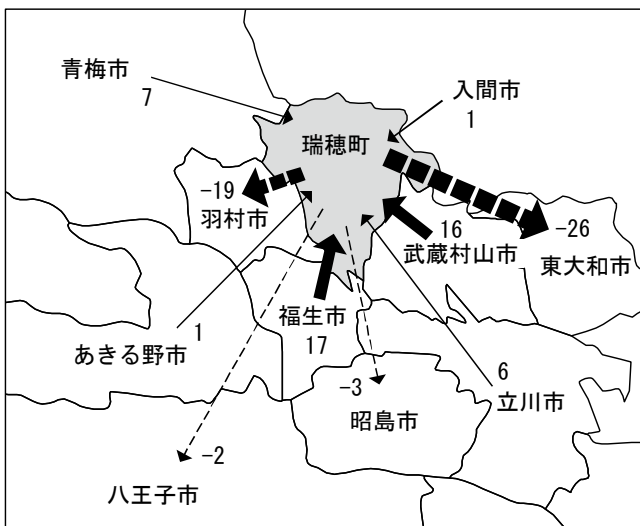
平成 24（2012）年に転入超過だったものが、平成 25（2013）年には転出超過に転じたのは立川市のみです。

平成 24（2012）年に転出超過で、平成 25（2013）年には転入超過に転じたのは昭島市と羽村市で、中でも羽村市では前年比で 82 人と大きく転入に傾きました。

その他の近隣市については平成 24（2012）年、平成 25（2013）年ともに転入超過となっていますが、転入超過、転出超過いずれも 30 人以内程度で小さな動きにとどまっています。

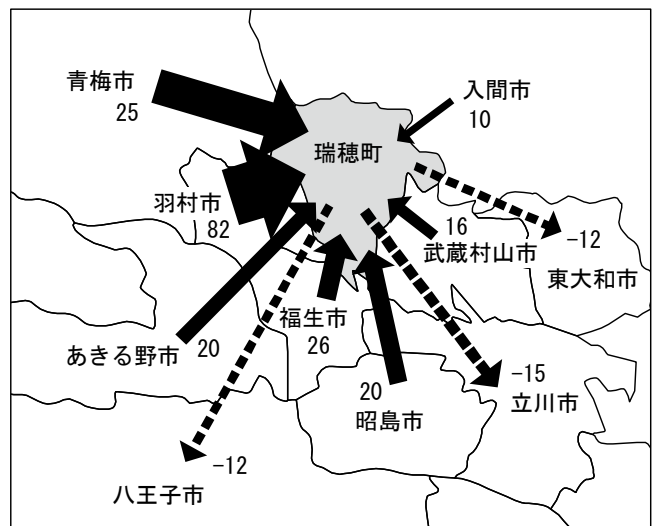
【周辺市との人口移動の最近の状況】

平成 24（2012）年



※実線は転入超過、破線は転出超過を示している。

平成 25（2013）年



資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

(3) 年齢階級別の人口移動分析

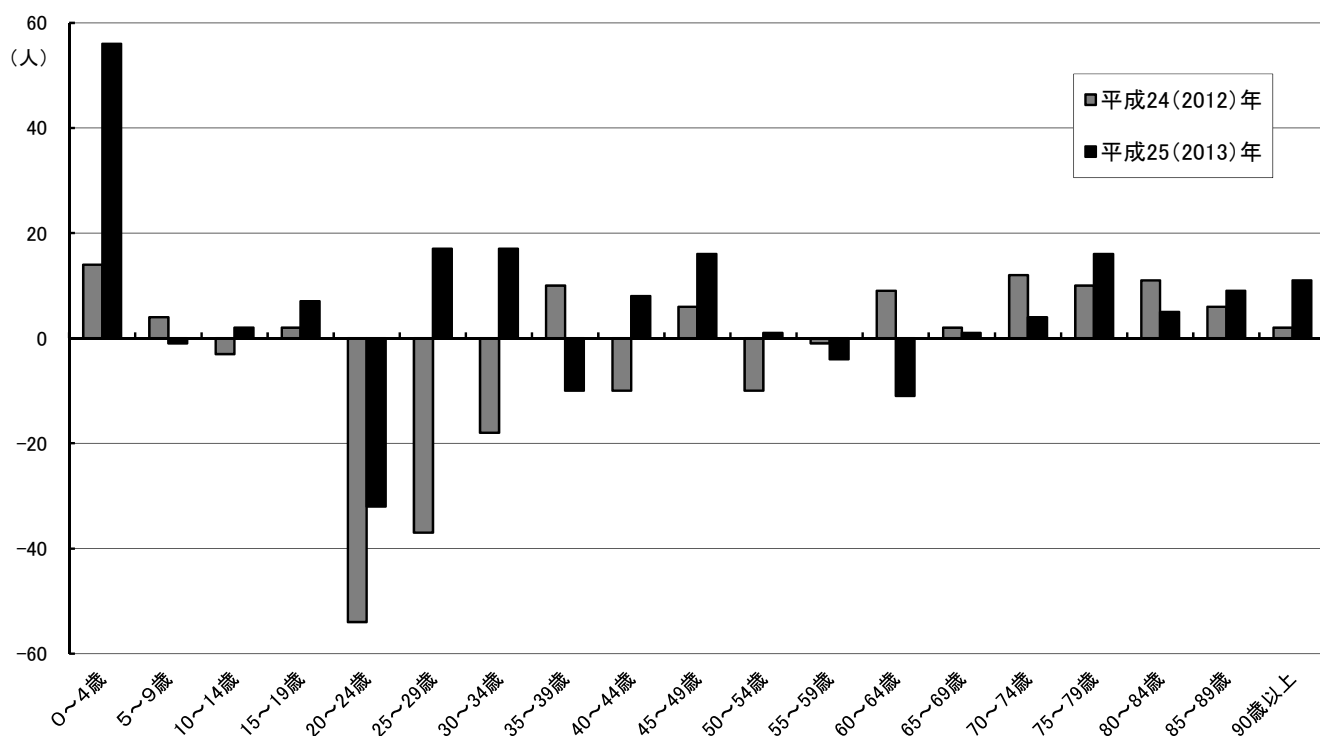
①年齢階級別の人口移動の最近の状況

平成 24 (2012) 年、平成 25 (2013) 年の年齢階級別の人口移動状況 (転入数－転出数) を見ると、30～34 歳以上では多くの世代で転入超過が見られているものの、いずれも人口増減が 20 人以内と大きな移動状況にはなっていません。

25～29 歳では平成 25 (2013) 年は転入超過となったものの、平成 24 (2012) 年は 37 人の転出超過、20～24 歳はいずれも 30 人を超える転出超過と、就労を決めるあるいは、働いて数年経った世代で転出している傾向がみられます。

一方で、0～4 歳については転入超過、なかでも平成 25 (2013) 年は 56 人の転入超過となっていることから、30 歳代前後の世代では乳幼児を伴った家族連れの世帯が転入してきていると推察されます。

【年齢階級別の人口増減の状況】



※プラスが転入超過、マイナスが転出超過を表している

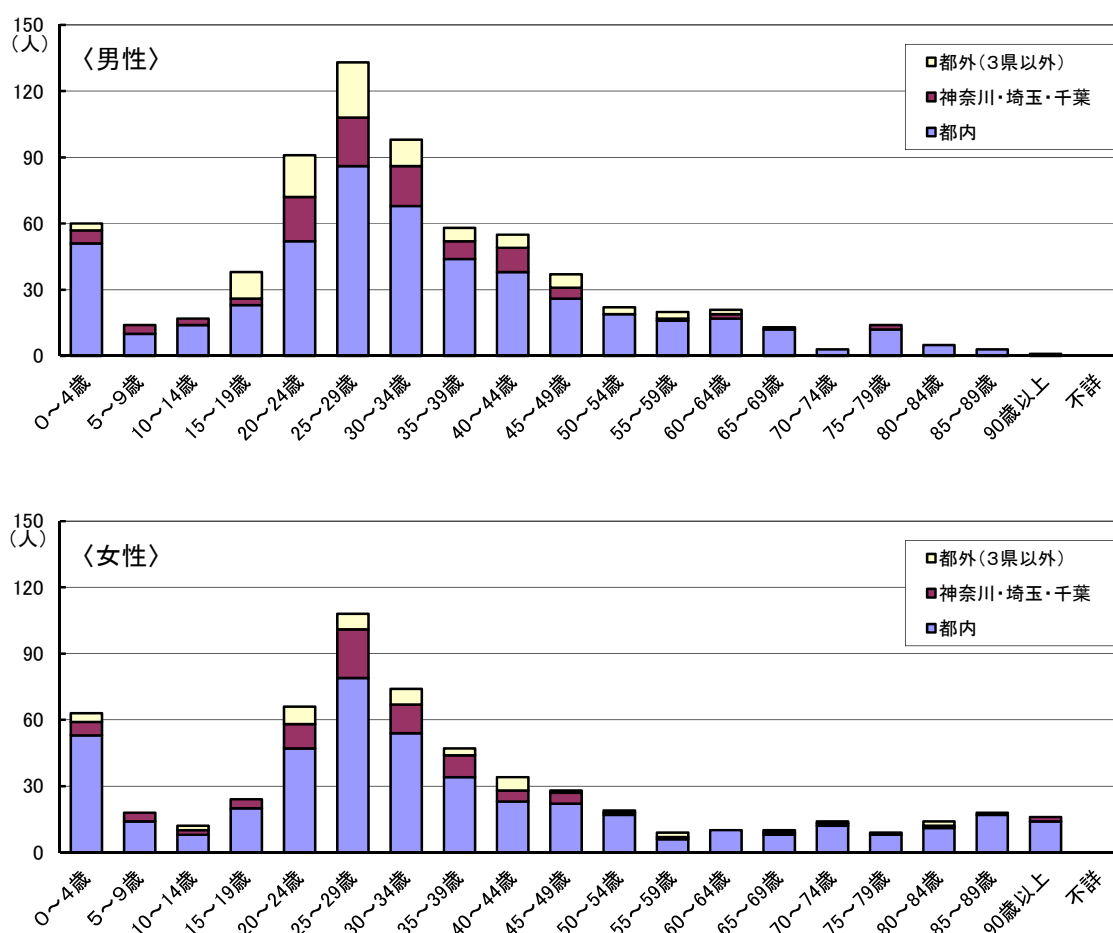
資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

② 3地域ブロック別の5歳階級別転入数の状況

地域を「都内」、「神奈川・埼玉・千葉」、「都外（3県以外）」の3地域ブロック（以下、「3地域ブロック」という。）に分割して5歳階級別の転入の状況を見ると、男性、女性ともに、どの世代でも都内からの転入が最も多くなっています。また、男性、女性ともに、0～4歳での転入が目立つほかは、25～29歳を頂点とした状況という点で相似しています。

男性では15～19歳から25～29歳の年齢層で「都外（3県以外）」からの転入も一定程度みられますが、女性は男性と比べると少ない状況となっています。

【5歳階級別転入数の状況】（平成25（2013）年、男女別）



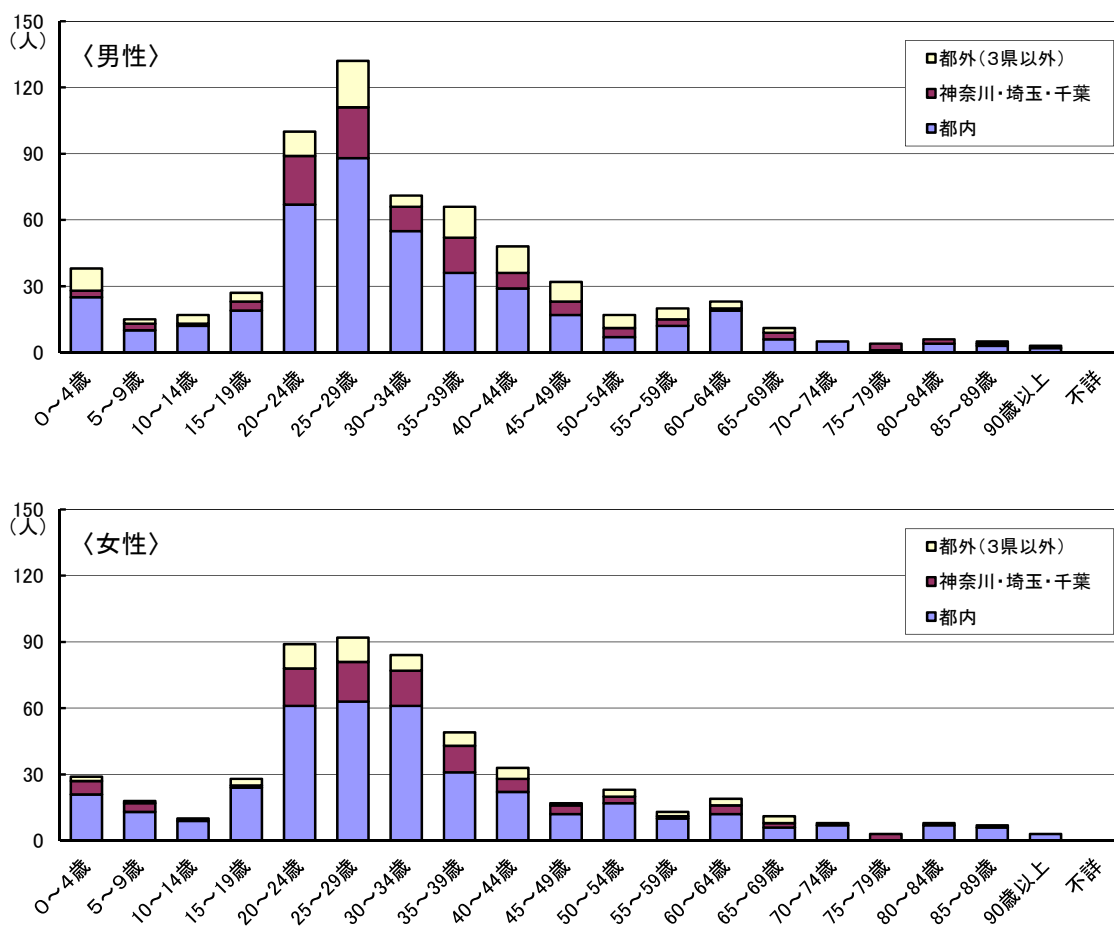
資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

③ 3地域ブロック別の5歳階級別転出数の状況

地域を3地域ブロックに分割して5歳階級別の転出の状況を見ると、男性、女性ともに、どの世代でも都内への転出が最も多くなっています。

男性、女性ともに20～24歳から30～34歳の年齢層で最も転出が多くなっていますが、女性はこの世代もほぼ同じような転出状況となっているのに対し、男性では25～29歳が非常に多く、30～34歳では女性よりも少ない転出数となっています。

【5歳階級別転出数の状況】（平成25（2013）年、男女別）



資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

④ 3地域ブロック別の5歳階級別純移動数の状況

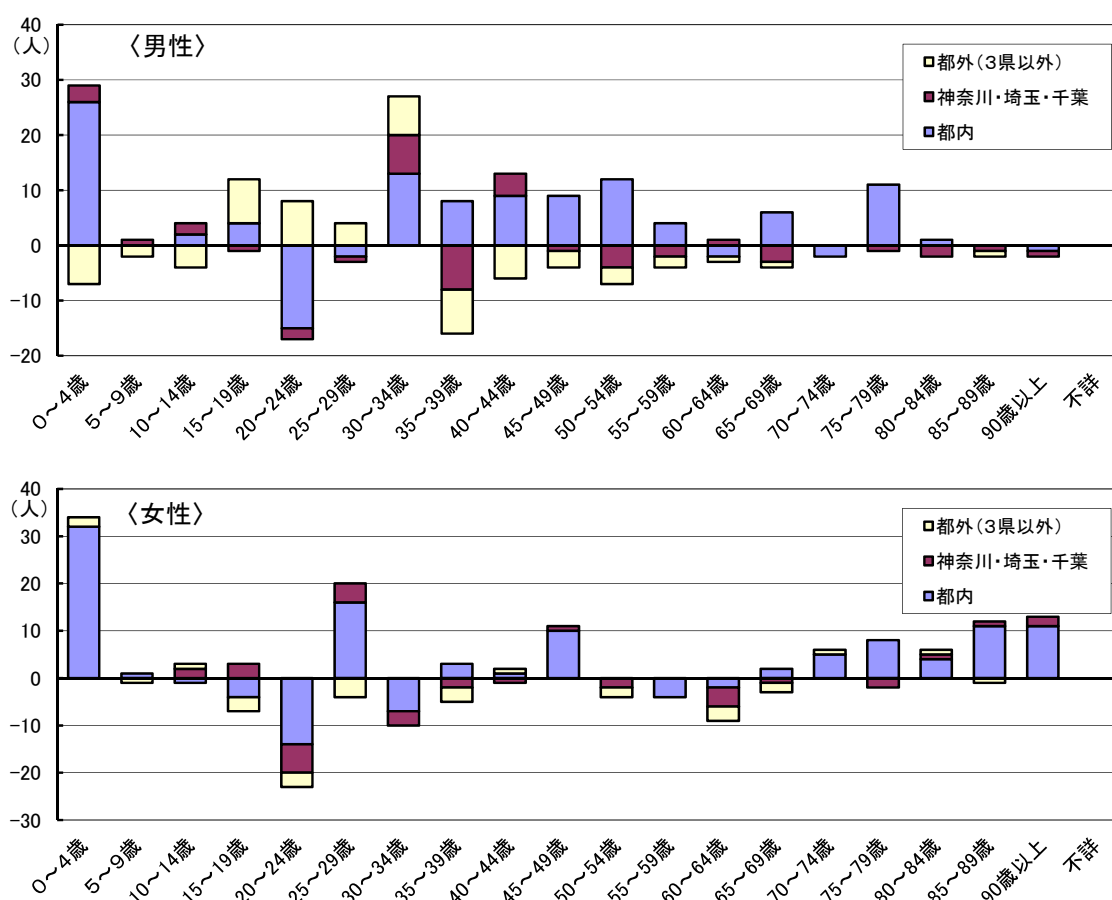
3地域ブロックで5歳階級別純移動数の状況を見ると、男性では多くの世代において「都内」との純移動では、20～24歳で転出超過の傾向がみられるものの、その他の世代ではおおむね転入超過の傾向がみられます。一方、「都外（3県以外）」については、15～19歳から30～34歳では転入超過の傾向がみられるものの、その他の世代では転出超過の傾向がみられます。

20人を超える大きな変動がみられるのは0～4歳と30～34歳の転入超過となっています。女性では0～4歳と25～29歳で都内からの転入超過が目立ち、男性の30～34歳の転入超過と併せて家族として転入している状況が推察できます。

一方、20～24歳では、3地域ブロック別いずれにおいても転出超過の傾向がみられます。

また、大きな傾向ではないものの、一般に高齢者になると進学や就労といった移動の要因が減るため移動の状況は小さくなると考えられがちですが、瑞穂町では女性において70歳以上で都内からの転入者が多く、85～89歳や90歳以上でも10人を超えています。

【5歳階級別純移動の状況】（平成25（2013）年、男女別）



資料：東京都住民基本台帳人口移動報告

⑤性別・年齢階級別の人口移動の状況

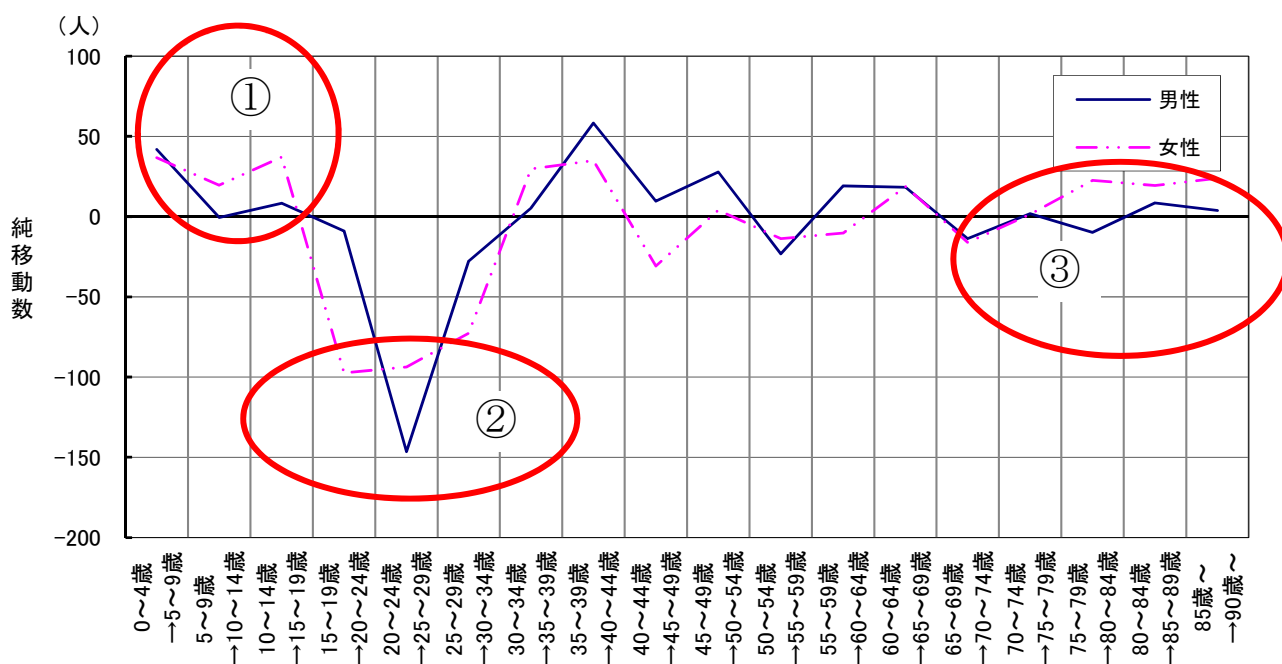
年齢階級別人口移動について平成7（1995）年→12（2000）年、平成12（2000）年→17（2005）年、平成17（2005）年→22（2010）年の近3回の値をそれぞれ平均したものが、以下のグラフです。近年の年齢階級別人口移動の傾向としては次のようなことが見受けられます。

0～4歳→5～9歳の純移動数がどの世代を通してよりも高く、乳幼児を伴った家族連れが多く転入していることが伺えます（①）。

一方で、20～24歳から25～29歳、または25～29歳から30～34歳においては純移動数が-50人より多い、つまり転出が非常に目立ち、①における保護者世代の年齢層が上がっている、または、転入する以上にそれ以外の独身世帯などの転出が増えていると推察できます（②）。

大きな傾向ではないものの、通常年齢が上がるとともに、転入、転出する要因が減少するため高齢者層はさほど純移動数を示しませんが、瑞穂町は70～74歳から75～79歳になるより上の世代の女性で転入する傾向が見られることが分かります（③）。

【平成7（1995）年→12（2000）年、平成12（2000）年→17（2005）年、平成17（2005）年→22（2010）年の年齢階級別人口移動の平均値】



資料：国勢調査

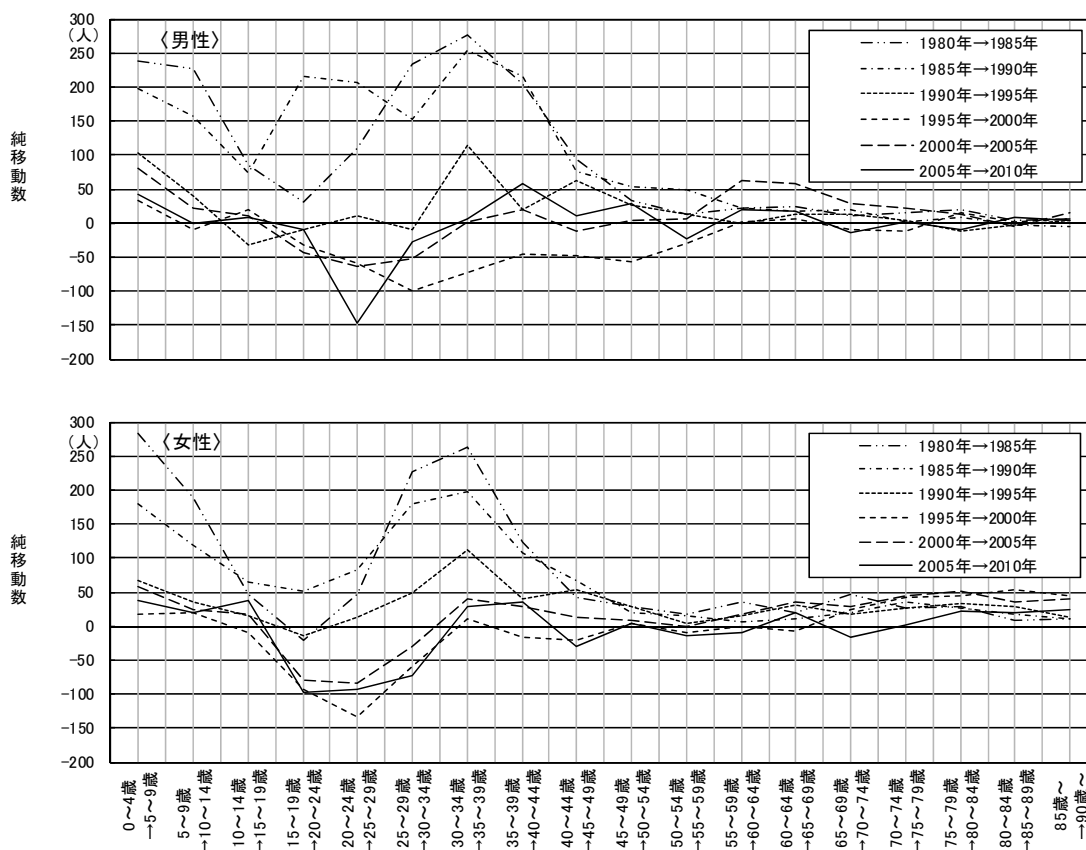
⑥性別・年齢階級別の人口移動の状況の長期的動向

おおよその傾向として、45～49歳から50～54歳になる時より上の世代においては、人口移動は男性においては0人前後、女性においてはおおよそ0人から50人前後の転入超過の間で推移する傾向となっています。それよりも若い世代においては、出生や進学、就職等をきっかけに転入転出する機会が多いこともあり、人口移動の振れ幅が大きくなっているものと考えられます。

中でも男性では1985年から1990年では0～4歳から5～9歳になる世代から40～44歳から45～49歳となる世代のいずれも50人以上の転入超過となっています。その後、各年代、各調査時点により多少の増減はあるものの、おおむね転出が超過する方向へと傾向が移行し、中でも男性の20～24歳から25～29歳となる世代においては1985年から1990年の時点では206人の転入超過となっていたものの、2005年から2010年の時点では、146人の転出超過となり、大きく傾向が変わっているといえます。

おおまかに見ると男女ともに、0～4歳から5～9歳になる世代では転入傾向が続き、5～9歳から10～14歳になる世代から20～24歳から25～29歳になる世代にかけては、かつては転入傾向も見られたものの現在では転出傾向へと移行し、25～29歳から30～34歳になる世代から40～44歳から45～49歳となる世代にかけては転入傾向が続いていると見ることができます。

【性別・年齢階級別人口移動の推移】



資料：国勢調査